
騎士団

あと

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士団

【Nコード】

N5283T

【作者名】

あると

【あらすじ】

3輪の花の番外編？ です。
主に騎士団の話が多いです。

騎士団は、人数多いくせにあんまり出てこないんでここで出します。

設定頑張って考えたのに使えないのが悲しすぎるから。

というわけで、騎士団は主にここで知るう!?

ヴォル↓カルモ

「あんだ、どこから来たん？」

剣の練習をしていた俺は、いきなり掛けられた声に驚く。

「あ、えつと…」

「ああ、ごめん、驚いたかもな、俺はカルモ・ヴィータ。今6歳やねん！」

「あ、俺はヴォル・ルーム。俺も6歳」

「同い年やなあ！！ 仲ようしてな？！」

「あ、うん。よろしく」

「俺な、1年前に城に来てん。今は付騎士の補欠や。もしかしたら誰かの付騎士になるかもしれんのやー！」

「へえ、俺は5ヶ月前に来て、今城騎士だよ。でも、城騎士も付騎士の可能性あるしね」

「お互いに付騎士になって同じ人に使えたらおもしろいなあ！ なんかの縁やでそんなん」

強い方言。これを口悪いといって嫌う人は多い。だから俺も隠す。この言葉遣いを。カルモと同じこの方言を。

「そういえば、カルモって方言強いな」

「ああ、俺が住んどったとこ、方言強かったん」

「へえ。でも、それを嫌う人も多いよな？」

「…だから隠しとん？ この方言を」

「？ え？」

「今、一瞬でたで。隠してもでてまうんが生まれつきの言葉や。俺は周りなんか気にせえへん。方言を使う田舎者を口悪い言っんは差別やろ。俺は自分らしく生きるで」

そう言って笑った。

かっこええって思った。

前、街に出たとき、この方言のせいで周りから変な目で見られた。姿かたちは変わらんはずなのに、話し方が違うって言うだけで変な目で見られた。だから俺は自分を殺した。周りを取った。標準語も頑張って覚えた。

でもカルモは違った。

自分を貰いた。周りの目なんか気にしてへんかった。

カルモは暗いところに閉じ込めた本当の俺に光を当ててくれた。

カルモは光やった。

それからというものの、俺とカルモは一緒におった。俺は標準語をやめた。周りに作られた殻を破った。手伝ってくれたんはカルモやった。

俺は自分らしく、生まれたときから親しんだ言葉を周りから奪い返した。

俺の目を覚まさしてくれたんはカルモやった。

カルモは俺の光やった。

出会ってから9年の時が経った。

お互いに仲のいい友達を作った。一緒にいる時間もあのときに比べれば減ってしまった。

でも、やっぱりカルモは俺の大事な人だった。今も、昔も。これからも。

「ヴォール！！　みてーハンモツクーー」

「またか」

「そう言わんと見てや」

「…カルモはほんまに好きやな」

「俺、城に来るまで暗闇におったから」

カルモに助けられて数年後、俺は知った。カルモの過去を。

カルモの村は、カルモが4つの時に滅ぼされたらしい。国の1番はしにあつた小さな村。隣国の兵によって滅ぼされた。でも、その村は小さすぎた。あんまり大きな事件にならんと、その村は国民の記憶から消されてった。

村が滅びた後、カルモは1年間、奴隷として地下牢獄に入れられとつたらしい。自力で脱獄後、たどり着いたのは城やったとか。そこで剣の腕が認められ、騎士として居場所を掴んだらしい。

はつきりしたことはあんまり知らん。でも、いろいろな人に調べたら、みんな言ってた。故郷が滅び、奴隷となり、脱獄し、城へ来た。

けど、そんな暗い過去さえも感じさせない笑顔。

まだ心に抱えるその闇。

その闇を、俺が消せるなら、少しでも消せるなら、俺の大事な人を、俺は……救いたい。

「ヴォール、一緒に寝えへん？」

「おう、今行くー」

ヴォル↓カルモ（後書き）

あるとです。

今回はカルモとヴォル編です。カルモの過去はみんなあんまり知らないです。

ヴォルの過去は、また書こうかなと。

なんか過去の話とか多くなりそうです・・・。

ベッロ兄弟

「怖いよ、お兄ちゃん…」

「大丈夫、大丈夫だから。ほら、兄ちゃんがいてるから」

「でも、怖い…」

泣きじゃくるマーレ《・》を俺はいつもいつも毎晩抱きしめていた。

俺のたった一人の大事な家族だったから。

愛おしい妹だったから。

暗い部屋の中、たまに聞こえるドアの向こうの足音にいつもびくびくしていた、幼い頃。

手足につけられた重い鎖。

たまにやってくる男が幼い俺達の身体を鞭打つ。

痛い痛い痛い痛い

でも、泣けない。妹の前じゃ泣けない。

捨てない。希望を。命を。

俺は負けない。いつか、ここを出てやる。鎖をほどいて、マールを連れて。

「この髪色は美しい。売れば、良い値になるだろう」

突然家にやって来た『人狩り』

そいつ等は人気の寂しいところにあつた俺達の家を目をつけていた。

父さんと母さんを殺し、俺とマールを奴隷として売りさばく為、連れ去った。

それから、俺達の日々は地獄だった。

けれど、俺達はなかなか売られなかった。

後で知ったけど、売ることができなかったらしい。

その頃、奴隷市場が厳しく取り締まられ、潰れていったのだという。

暗闇の中、支えあつて生きてきた俺達に、あるとき、光が差した。

『兵隊』—— 城の騎士たちが、俺達を助けてくれた。

「大丈夫か」

それから彼らの手によって俺達は施設に連れて行かれた。

身寄りの無い、俺達と同じ状況の子供が沢山いた。

そして聞いた。騎士団は、王や王妃の命令で取り締まっていたのだと。

王家は、騎士団は、俺達の恩人だった。

だから、施設で一生懸命剣に励んだ。

沢山勉強した。

何回も騎士団選考に挑戦した。

そして、兄妹そろって合格することができた。

女性は騎士になれないと思っていた。

マールは、髪が長い。女だとはれるんじゃない、と心配になった俺達は、名前を交換した。

俺はマールに、妹はラーゴになった。

そして、今――

「マールーっ……!……!」

かけてくる『ラーゴ』

女だつてことは秘密だけど、王家の人は皆知つてる。

知っていて、『ラーゴ』に付騎士という地位を与えてくれた。

「女性の方がいいことだつてあるのよ」

昔、リオン様はそういつて俺たちを撫でてくれた。

「ラーゴ、もう少しおとなしくなつたらどうなんだ？」

「うつせえー。俺の勝手だ」

「・・・そうか」

男言葉もラーゴは一生懸命覚えていた。

「…無理はすんなよ？」

「？　　おー」

こうやって今笑つてられるのも、光の中に入れるのも、みんな、
王の、王妃のおかげだから。

命に代えてでも、守ろうと誓った。

ベッロ兄弟（後書き）

あるとです。

もうこの話消そうかな、って思ったときにお気に入り登録が！！！！！！

嬉しかったので書こうかと。

今回はマールとラーゴの兄弟。

実はラーゴが女で名前が逆って言う↑

前から考えてた設定です。ややこしい・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5283t/>

騎士団

2011年8月22日14時20分発行